

50世帯、150人が暮らす大東町中川の京津畑集落。この小さなコミュニティに今年4月、「緑のふるさと協力隊」の渡邊亜里沙さん(23)がやってきた。NPO法人地球緑化センターは、少子高齢化や過疎化に負けず、地元を元気にしようと頑張っている全国の農山村に同協力隊を派遣している。亜里沙さんは隊員の一人。「京津畑で、人に寄り添った生活を経験したい」と瞳を輝かせる。

愛知県出身の亜里沙さん。福祉大を卒業後、1年間、高齢者福祉施設に勤めた。そこで、おばあちゃんたちから田舎の良さや農作業の魅力を口々に言われたという。「おばあちゃんたちが経験した農業をやってみよう。震災後、報道されなくなった内陸の様子も自分の目で確かめたい」。こんな思いから「岩手行き」を希望した。

「日本に、こんなきれいな所があったんだ」。自然豊かな農村風景、小鳥や虫の鳴き声、美しい星空など想像を超えた景色や環境に驚いた。ここでの暮らしは、何もかもが新鮮だった。

仕事は主に、地域の人たちの手伝いだ。農作業を手伝って農家の大変さに気付いた。天候に左右される農業の難しさを知ることができた。同時に、何でも手に入る都会の生活は、便利で恵まれていると、自分の暮らしを見つめ直すきっかけにもなった。

古里を離れ、一人で暮らす。不安がないとは言えないが、いつも誰かが声を掛けてくれるから寂しくない。一日中、誰とも会わない生活はここにはない。人との関わりが深い京津畑で、それはごく自然なことなのだ。

今の生活には仕事も休暇もないが、

美しい景観や環境は想像以上
 もっと広めたい、人に寄り添う暮らし方



大東町の京津畑集落に派遣されている緑のふるさと協力隊

渡邊亜里沙さん

Watanabe Arisa 23 大東町中川

自然と触れあい、人と関わる毎日の中で、小さな喜びにも大きな幸福感を得られるようになった。「普通の遊び方を忘れてしまったみたい」とほほ笑む。決して便利とは言えないが、「昔から変わらないすてきなものがたくさん残されている」とも。一人で「岩手行き」を決めた時、告げられた家族は驚きを隠せなかったという。そんな家族も、今では京津畑の大ファン。正月には家族を呼んで、「京

津畑産の小豆を使ったあんこ餅を食べたい」とにっこり。「生きる基礎を作る農業ってすごい。みんなに京津畑のほっと落ち着く、ぬくもりある風景を知ってほしい」。京津畑に訪問者が来ると、集落のみんなが喜ぶ。そして、心からもてなす。「もっと農山村と都市との交流機会が増えればいい」と願う。派遣期間は1年。雪国の冬を経験しながら、残る半年も全力で向き合う。

Profile 1989年生まれ。愛知県名古屋出身。NPO法人地球緑化センターが主催する緑のふるさと協力隊として、今年4月から大東町中川の京津畑集落へ1年間派遣されている。農業体験をしながら、一日一日を全力で、人に密着した生活を送る。大東町中川在住。23歳



農作業などが無いときは、やまあい工房「山がっこ」で調理の手伝いなどをする。ここで提供するものはすべて会員の手作り。毎週火曜日は、手作り惣菜の訪問販売日。楽しみにしている人も多い。11月11日@には「京津畑まつり食の文化祭」が行われる。



陸中門崎駅

Rikuchu Kanzaki_sta.

「水害を乗り越えてきた駅」

10月上旬、JR大船渡線「陸中門崎駅」を訪ねた。同駅は大正14(1925)年7月26日、摺沢駅、陸中松川駅と同時に開業した同線の中で最も歴史ある駅の一つ。一関通運、日本通運の事務員として長年、同駅構内で働いていた金野百合子さん(86)が今回の案内人。薄衣、弥栄、千厩、藤沢などの人たちが利用する陸中門崎駅は、川崎村の玄関といわれ、当時は通勤・通学だけで毎日400人以上が利用したという。駅の近くにはいくつもの製材所があり、引き込み線が引かれていた。本線と引き込み線を行き交う貨車は1日10両以上。地域の人たちが人力で動かした。

木材、まき、炭、生石灰、消石灰、花こう岩、米麦、葉タバコや家畜など、あらゆる「モノ」が入出荷された。「駅前には長屋や旅館もあり、にぎやかでした」と百合子さん。北上川と砂鉄川が合流する川崎地域は、大雨のたびに川が氾濫した。中でも平成23年のアイオン台風の際は、同駅待合室まで浸水したという。「駅前の家々が流される様子を目の当たりにした。怖かった」と振り返る。平成18年に砂鉄川堤防が完成。人々はようやく水の脅威から解放された。住民と共に水害を乗り越えてきた陸中門崎駅。同駅を発車した上り列車は東北一の大河北上川を越え、真滝駅へと向かう。



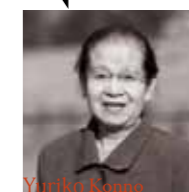
④陸中門崎駅前の風景。水の脅威から解放されたのどかな街並みが広がる
 ⑤駅の外観。駅の看板は建て替え前のもの



⑥北上川にかかる北上川橋りょう。車内から撮影
 ⑦ホームには猫の姿も
 ⑧通勤・通学で多くの人が利用する陸中門崎駅。早朝は混み合う

案内人

金野百合子さん
 元日本通運職員 川崎町門崎字渡戸



かつて川崎村の玄関といわれたこの駅は街の中心。今もなお多くの人が利用しています。朝は、通勤・通学の人たちの送迎で車が60台以上連なることもあります。